

平成 31 年 2 月 4 日

名前：尾崎裕之

学歴：慶應義塾大学経済学部卒、ウィスコンシン大学マディソン校大学院（経済学で Ph.D. を取得）

職歴：加ウエスタン・オンタリオ大学経済学部助教授、東北大学経済学部助教授を経て、現在、慶應義塾大学経済学部教授

最近、方向性が変わってきたね、と言われます。そんなことはないのです。アメリカ留学という「ショック療法」で、強引に捻じ曲げたベクトルの方向が、元に戻りつつあるだけです。ベクトルの絶対値は確実に大きくなっている（と、信じたい）。

Cinema Is King!（以下、しばらく映画関連）

映画「アメリカの夜」でのトリュフォー監督（彼自身が映画監督役で出演している）の台詞（の英訳）。

二十歳くらいの時、「これまでに見た映画の中から、個人的なベスト 3 を決めておくことはそれほど無意味でもなかろう」と思い、選んだのが、「アメリカの夜」「惑星ソラリス」「ゴッドファーザーPARTII」であった。ほとんど迷わず、あっさりと決まった。

驚くことに、それからウン十年以上経った現在でも、この 3 本が依然として「私の観た映画ベスト 3」である。その後、映画を観なくなったわけではないし、もちろん、映画が進歩していないわけでもない。10 代の感性がいかに強烈であるかということの証左である。大学 4 年間で受けた講義の内容はほとんど忘れてしまっている。（これに対し、高校で受けた授業はもの凄く鮮明に記憶している。「現国」とか）

勉強なんていつでもできる。映画でも、演劇でも、読書でも、旅行でも、10 代のうちに体験・経験しておかなくてはならないことは勉強以外に山ほどある。悔いのない人生を！（「12 人の優しい日本人」より）

（でも、「体育」とか、凄い嫌だった。やったけど。堺雅人さんもそうだったらしく、「体育館履き」という言葉からして嫌だったと言っていた。全く同感。笑）（20180801）

観た映画を★の数で（満点は★5 つ）5 段階評価するシステムを個人的に採用

★★★★★（最高点。網羅したつもりが、かなり漏れていました。まだ多少書き足します、と言いつつ、ボロボロ出てきます。）

ヨーロッパ映画（イギリス映画は基本的に除く。このあたりの分類はかなりいい加減です）
8½（1963 年。フェデリコ・フェリーニ。以下、特に断らなければ、監督を指す。音楽：ニ

ーノ・ロータ)

山猫 (1963年。ルキノ・ヴィスコンティ。ニーノ・ロータの音楽!)

華氏 451 (1966年。フランソワ・トリュフォー)

地獄に堕ちた勇者ども (1969年。ルキノ・ヴィスコンティ)

ベニスに死す (1971年。ルキノ・ヴィスコンティ。主演：ダーク・ボガード、否、ビョルン・アンドレセン、否、本当の「主演」はマーラーの「アダージェット」)

惑星ソラリス (1972年。アンドレイ・タルコフスキー。ハリウッド版の「ソラリス」(2002年)ではない。映画芸術の最高峰)

アメリカの夜 (1973年。フランソワ・トリュフォー。出演：ジャクリーン・ビセット、ジャン＝ピエール・レオ、フランソワ・トリュフォー。個人的には、全映画の中で、一番好きな映画。「皆が役に入り込み、スタッフの腰も据わる。映画こそ王様」)

大理石の男 (1977年。アンジェイ・ワイダ)

緑色の部屋 (1978年。日本公開、1980年、於岩波ホール(!) 主演：フランソワ・トリュフォー、ナタリー・バイ。トリュフォーに追いついた(ロードショー館で観た) 記念すべき最初の映画)

パリ、テキサス (1984年。ヴィム・ヴェンダース。出演：ハリー・ディーン・スタントン、ディーン・ストックウェル。D.ストックウェルは「刑事コロンボ」(!)の常連)

ベルリン・天使の詩 (1987年。ヴィム・ヴェンダース。別欄参照)

ニュー・シネマ・パラダイス (1988年。ジュゼッペ・トルナトーレ。エンニオ・モリコーネの音楽!)

アメリカ映画 (含む、イギリス映画)

十二人の怒れる男 (1957年。シドニー・ルメット。主演：ヘンリー・フォンダ。「12人」ジャンルの嚆矢。これを観ると、同じシドニー・ルメット監督が、後年、「オリエン特急殺人事件(1974年)」を作ったとは到底思えない。「オリエン特」が全然ダメということ)

博士の異常な愛情 (1964年。原題：Dr. Strangelove: or How I Learned to Stop Worrying and Love the Bomb) スタンリー・キューブリック。主演：ピーター・セラーズ(1人3役))

2001年 宇宙の旅 (1968年。スタンリー・キューブリック。20181030 追記。下欄参照)

スティング (1973年。ジョージ・ロイ・ヒル)

ジャッカルの日 (1973年。フレッド・ジンネマン監督、エドワード・フォックス主演。記載漏れ。20181005 追記。何度も何度も観ているけれど、見るたびに良くなる。周到に張り巡らされた伏線。それが全て回収されるのは圧巻。E.フォックスも凄く良い。)

ゴッドファーザーPARTII (1974年。フランシス・フォード・コッポラ。音楽：ニーノ・ロータ)

未知との遭遇 (1977年。原題：Close Encounters of the Third Kind) スティーブン・スピルバーグ)

スター・ウォーズ (1977年。後に「スター・ウォーズ 新たなる希望」と改題。ジョージ・ルーカス)

ナイル殺人事件 (1978年。ジョン・ギラーミン。音楽：ニーノ・ロータ (!) 原作を読む前に観た、おそらく唯一のミステリー映画。でも、ネタバレ一切関係なく、ミステリー映画の金字塔)

エイリアン (1979年。リドリー・スコット)

殺しのドレス (1980年。ブライアン・デ・パルマ。「ヒッチコック愛」に満ち溢れたデ・パルマの最高傑作。完成度、滅茶苦茶高し。)

帝国の逆襲 (1980年。アーヴィン・カーシュナー)

遊星からの物体X (1982年。原題：The Thing ジョン・カーペンター。「遊星よりの物体X」(1951年)のリメイクを超越した「リメイク」)

ジェダイの復讐 (1983年。後に「ジェダイの帰還」と改題。リチャード・マーカンド)

ストレンジジャー・ザン・パラダイス (1984年。ジム・ジャームッシュ)

JFK (1991年。オリバー・ストーン)

セブン (1995年。デヴィッド・フィンチャー)

12モンキーズ (1995年。テリー・ギリアム)

コンタクト (1997年。ロバート・ゼメキス)

L.A.コンフィデンシャル (1997年。カーティス・ハンソン)

シックス・センス (1999年。M・ナイト・シャマラン。同監督のデビュー作。2作目の「アンブレイカブル」もかなり良い (★4つ)。しかし、3作目の「サイン」から、かなりおかしなことになってくる。ビギナーズラックか？ 20180323 追記)

ダークナイト・ライジング (2012年。クリストファー・ノーラン)

フォースの覚醒 (2015年。J・J・エイブラムス)

メッセージ (2016年。ドゥニ・ビルヌーブ。「サピア=ウォーフの仮説」(!))

ダンケルク (2017年。クリストファー・ノーラン) 別格なので、別欄で詳述。

日本映画

七人の侍 (1954年。黒澤明)

蜘蛛巣城 (1957年。黒澤明)

隠し砦の三悪人 (1958年。黒澤明)

用心棒 (1961年。黒澤明)

椿三十郎 (1962年。黒澤明)

天国と地獄 (1963年。黒澤明)

砂の器 (1974年。野村芳太郎。何でこんな大事なのを忘れていたのだろう。20180216 追記)

犬神家の一族 (1976年。市川崑。主演：石坂浩二、音楽：大野雄二。「こ、殺されたのは、す、佐武(すけたけ)君だったんですね」なお、同じ監督、主演による2006年版はなかつ

たことになっている。市川監督、済みません)

不連続殺人事件 (1977年。曾根中生。主演：内田裕也、小坂一也、田村高廣、松橋登、などなど、そうそうたる顔ぶれ！)

乱 (1985年。黒澤明。別欄参照)

ゆきゆきて、神軍 (1987年。原一男。ドキュメンタリー。20180323 追記)

マルサの女 (1987年。伊丹十三)

12人の優しい日本人 (1991年。中原俊。脚本：三谷幸喜)

シコふんじゃった。 (1992年。周防正行。20180323 追記)

ミンボーの女 (1992年。伊丹十三。20180323 追記)

愛のむきだし (2009年。園子温。20180323 追記)

告白 (2010年。中島哲也。20180323 追記)

八日目の蟬 (2011年。成島出。20180216 追記。別欄参照)

ソロモンの偽証 前篇・事件 (2015年。成島出。あくまで、前篇。話に落ちを付けなくて良いことを、最大限に活用。(エイリアンのように、画面右から突然顔を突き出す) 永作さん+雪が降る屋上+アルビノーニのアダージョ、圧巻。別欄も参照)

シン・ゴジラ (2016年。総監督・脚本・編集：庵野秀明。監督・特技監督：樋口真嗣)

カメラを止めるな！ (2018年。監督・脚本：上田慎一郎) 英語タイトル(?)に“One Cut”とあるように、秘密にしているわけではないのだけれど、10分経過位でその仕掛けがわかる。ヒッチコックやデ・パルマの亜流か、と思いきや、いやいや、そんなものではない。映画愛に満ち溢れた傑作中の傑作。★6つでもよい。このような映画が撮られてヒットする日本の将来は明るい(皮肉ではなく)つくづく思った。(20181005)

★★★★☆ (最近観たものか、あまり有名ではないと思われるものに限りです)

悪魔の追跡 (1975年。ジャック・スターレット。主演：ピーター・フォンダ、ウォーレン・オーツ。「B級ホラー」の金字塔)

燃える昆虫軍団 (1975年。ヤノット・シュワルツ。主演：ブラッドフォード・ディルマン。思い出してしまいました。1975年、B級ホラーの黄金期だな)

「ダークナイト・ライジング」と「ダンケルク」を除くすべてのクリストファー・ノーラン作品：ちゃんと書きますね。メメント、インソムニア (アル・パチーノ、ヒラリー・スワック、ロビン・ウィリアムズ)、バットマン ビギンズ、ダークナイト、プレステージ、インターステラー

遊星からの物体X・ファーストコンタクト

櫻の園 (1990年)

ソロモンの偽証 (後篇・裁判)

ヘイトフル・エイト

ブリッジ・オブ・スパイ

ログ・ワン/スター・ウォーズ・ストーリー

アイデンティティー (レイ・リオッタが滅茶苦茶いい)

バタフライ・エフェクト (ゼミ生に教えてもらいました。多謝)

パターソン (2016年。ジム・ジャームッシュ監督。別欄参照)

オリエン特急行殺人事件 (2017年。ケネス・ブラナー監督・主演) 別欄で詳述。

スリー・ビルボード (2017年。マーティン・マクドナー監督。別欄参照)

ウィンストン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男 (2018年) なんとなくスルーしていたのを、飯田橋ギンレイホールに初上陸して鑑賞した、個人的に記念すべき第1作。冒頭、余り映画に乗れない。さらに、遅刻してきた男女2人連れ(暗くてよく見えなかったので、詳細は不明)がドタドタと大音響を立てて劇場前方の席に着席するかと思いきや、何故かUターンして、劇場後方、僕の1つ空けて隣の席に着席。すっごく嫌な予感。予感が的中して、しばらくすると2人揃ってスマホを見始める。これはさすがに注意だな、と思ったとき、劇場支配人が登場し、小さな声で、しかし非常に厳しく注意。これ以後、2人組が静かになる。気が散っていた僕は、ここで映画に集中。この辺りからがぜん面白くなる。最初は、少々鼻につく感のあったゲイリー・オールドマンの演技が、そうでもない、いや、凄い名演技であることに気づき始め、圧倒される。裏「ダンケルク」のような(と言っても、どちらが表かはわからないが)、歴史好きにはたまらない映画。終わり方も圧巻。(20181026)

グッドフェローズ (1990年。マーティン・スコセッシ監督、レイ・リオッタ、ロバート・デ・ニーロ、ジョー・ペシ主演) ケーブルで放送したのを録画して、その後スルーしていたのを、何故か気が向いたため鑑賞。どうしてこれまで見ていなかったのかが不思議なくらいの大傑作。スコセッシさん、巨匠に認定します。こちらを先に観ていたら、邦画「告白」(上記を参照)は確実に★4つにランクダウンして、こちらが★5つになった。中島監督はこの映画を絶対に観ていたはずで、この映画の手法を参考にして「告白」を撮ったはず。観てしまったものの記憶は消せないで、「グッドフェローズ」には惜しい結果となった。(俺って何様?) (20181026)

★★★★☆☆

最後のジェダイ (2017年。ライアン・ジョンソン監督。別欄参照)

★☆☆☆☆ (最悪。無かったことにしたい)

オデッセイ。関ヶ原。

「ダンケルク」解題

映画監督でなくて良かったと心から思った映画。映画監督になろうともしていないし、なれもしなかったと思うが。これを超越する映画を作らなければならない、というのは絶望的に無理な目標、それほどの映画。経済学者として、ノーベル賞が目標です、と言うのとは次元が

違う。

冒頭、one week、one day、one hour とサブタイトルが入るが、全く意味不明。以下、2等兵（プライベート。済みません、よく知らない俳優さんです）、マーク・ライランス（「ブリッジ・オブ・スパイ」以来、大好きな俳優。同映画の決め台詞、Would it help? は、僕も真似して多用）、トム・ハーディ（本作の彼、滅茶苦茶恰好よい）の3つのエピソードが並行して描かれる。

同じ、有名なダンケルク撤退作戦の話のはずが、2等兵がUボートで撃沈されるシーンは夜、なのに、後の2つは昼間。「アレツ」となるが、撃沈のシーンに出てくる指揮官のような人と、ライランスに助けられる兵士が同一の俳優（多分）であることに気が付く。この瞬間、冒頭のサブタイトルの意味が分かり、啞然。ノーラン、凄すぎる。

3つの異なる長さの時間で起こっていることが、映画内、同じ2時間で描かれる。つまり、進行の速度が違う。相対性理論。映画でこれをやるか？（ちなみに、「メメント」は、数学でいう backward induction の映像化。ノーラン、数学者か？）

故に、同じシーンが3回、視点を変えて（2等兵、ライランス、ハーディのそれぞれの視点で）描かれる。このくだりの後、僕は泣き通しでした。映画史が塗り替えられる瞬間に立ち会ったという感動で。映画監督でなくて良かった。いや、本当に。

「オリエント急行殺人事件（2017年）」解説

以下、シドニー・ルメット版（1974年）を観ていることを大前提に書きます。全然難しい映画ではないので、「解題」ではなく、単に「解説」です。評価「★4つ」なのでスルーしてもよいのですが、或る新聞の映画欄で酷評されていて、このままだと全然フェアだと思えないので、書くことにします。（この「酷評」のせいで観るのをやめようかと思った。でも、観に行ったら本当に良かったです。僕的には、上からもわかるように、★4つは凄い好評価です）

「手垢の付いた？オリエント急行を何故にいまさら再映画化するのか？」三谷幸喜版（テレビドラマ、2夜連続の長尺）では、前半を（同作へのオマージュの意味も込めて）あえてルメット版とそっくりにし、後半（これだけで2時間以上）の全部を使って全く新しい話（原作には一切ない）を作るという明確な意図があったし（「砂の器」狙いの。多分）、デヴィッド・スーシェのテレビ版は、ルメット版が余りにもあっさり片付けてしまった、終局のいわゆる「2つの解答」問題のところを滅茶苦茶シリアスに描き（「罪と罰」的に）、ルメット版の持つフレーバーを完全に覆したいという意図があったのでしょ（多分）。

で、このブラナー版ですが、その意味からすると、信じられないくらい「普通」です。なのに、滅茶苦茶面白い。これだけ普通に作って、これだけ面白い。ケネス・ブラナーさんが凄い才人であること（これは認めざるを得ない）、そして、彼は、そのことを思いっきり世界に見せつけたかった。こう結論するしか、映画の意図を説明する方法はありません。

映画冒頭で、ヴァネッサ・レッドグレイヴさんとショーン・コネリーさんの会話をアルバ

ート・フィニーさん演じるポアロが盗み聞くという、ルメット版の有名なシーンの忠実な再現があるのですが、レッドグレイブさんの代わりに、スター・ウォーズ新シリーズのデイジー・リドリーさんが登場し（これ、ある意味、主役級の扱いですよ）、コネリーさんが演じたアーバスノット大佐が黒人設定（！ 済みません、この俳優さん、知らない方でした）になっている、から始まり、終幕、老女優役のミシェル・ファイファーさん（ルメット版では、ローレン・バコールさん）が鬢をとって一気に老けるところまで（これ以外にも、「細かい」仕掛けが満載）、全く飽きずに全篇観れます。（でもこのあたり、最初に言ったように、ルメット版を観ていることが前提です。）

「ダンケルク」でも格好良かったし、凄いぞ、ブラナー！

“Luke Skywalker Has Vanished”（「スターウォーズ・トリロジー」＋「フォースの覚醒」＋「最後のジェダイ」）

「最後のジェダイ」、★3つなので、それほどの高評価ではないのですが、あくまで映画の完成度からの評価で、個人的にはとても満足です。前半はもの凄く心配でしたが...

「トリロジー」（エピソード1、2、3ではない）をリアル・タイムで観ている世代として、「SW シリーズって、やっぱりマーク・ハミルの映画だよな」というのがあります。スター・ウォーズ（正編）では、ハミルも、ハリソン・フォードも、まあ、対等です。でも、「帝国の逆襲」では、すでに人気面で差が付き始めていて、「ジェダイの復讐」では、マーク・ハミル、久し振りだな！となります。その段階で、ハリソン・フォードは人気面でも、出演作の量でも、俳優として磐石です。その一方で、マーク・ハミルはというと...。友人の一人は、「俳優としての力量の差」と言います。えーっ、そうですか？ 役柄上の設定、大きくないですか？ ハリソン・フォードの少し不真面目な態度、これがよいと言う人は多いですが、これ、そういう役なのです。フォースを持っていることが、これだけ裏目に出るって、一体？ It's not fair!

ずーっと、そう思っていた僕だからこそその「フォースの覚醒」のラストシーンでの号泣となるわけです。SW シリーズって、やっぱりマーク・ハミルの映画だよな！！ 「最後のジェダイ」、だから良いのです。（前半はかなり心配でしたが。くどいか）あんな格好の良い最後を迎えることができ、ルーク・スカイウォーカー、本当に良かった。（20180119）

追悼：ハリー・ディーン・スタントンさん

Harry Dean Stanton さんが昨年の9月に亡くなりました。「エイリアン」で彼を知り、その後、「バリ、テキサス」でついに主演、そのあまりにも堂々とした主役ぶりに、驚き、かつ、涙したものです。

昨年の夏に、日吉学生部の方々と夕食をご一緒したとき、「映画と言えばゴッドファーザーPARTII」という点で、Kさんと意見の完全一致をみました。同作についてべらべらと喋り捲り、同作を猛烈に見たくなって、その後直ぐに見返してみて、気が付いてしまいました。

最後の最後、裁判の重要証人を警護していた（で、ホテルの部屋でポーカーをしていた）2人のFBI エージェントのうちの1人が、無名時代のスタントンさんでした。「あっ、ハリー・ディーン・スタントンだっ！」エンドロールで確認したので間違いありません。（FBI agent #1: Harry Dean Stanton となっていた）なんで、これまで気が付かなかっただろう？何度も何度も、この映画を観てるのに。

その翌朝の新聞で、亡くなったとの記事を読み（嘘ではない）、こういうこともあるんだなど、しみじみしてしまいました。少し遅くなりましたが、ご冥福を心よりお祈りいたします。（20180121）

鉄（くろがね） ッ! 鉄!! わらわを笑いものにする気か!（「乱」）

昨年、4K デジタル修復版が発売されてから、もうこれでもかというくらいに何度も何度も繰り返して観ています。なんでこんな映画が作れたんだろう？本当に不思議。しかも、もっと不思議なのは、「黒澤映画ベスト10」のような企画で、絶対にランクインしない。（昨年末のBS プレミアムの特集でもそうだった。）何故だ？

井川比佐志さん（「鉄」）、原田美枝子さん（「楓の方」）、そして、1年前に亡くなられた根津甚八さん（「一文字次郎」）の「奇蹟」としか言いようのない演技。最後のこの3人によるくだり、「女狐！ よくも殿をたぶらかし無用の策を弄して一文字家を亡ぼしたな。今こそ思い知ったか！ 女の智慧の浅はかさを！」（鉄）、「浅はかではありませぬ。親兄弟の恨みのこもったこの城が燃え、一文字家が亡びる様を、わらわはこの眼で見たかった！」（楓）、「おのれッ！」（鉄）。余りの凄いので、再録してしまいました（笑）。中盤の原田さんの絶叫が、頭から離れない。（20180123）

自由境界問題（「ソロモンの偽証 前篇・事件」（★★★★★）、「同 後篇・裁判」（★★★★☆））BS プレミアムで放送していたのを観て、改めてその素晴らしさに感動。少し解説したくなりました。

「自由境界問題」は、微分方程式にかかわる数学用語で、簡単に説明すると次のようなものです。微分方程式とは、導関数を用いて定義される関数方程式（解が関数であるような方程式）のことで、ある関数の導関数たちとそれ自身が、その方程式を、任意の変数について満たすときに、その関数が「解」となります。1次の導関数のみが含まれる微分方程式を「1階の微分方程式」、2次の導関数が含まれるものを「2階の微分方程式」、などなど、と言います。極端に単純化して説明すると、微分方程式を解くためには、積分する、すなわち、原始関数を求めるという作業をしますが、積分する度に自由に定めてよい定数が現れます（積分定数）。故に、例えば、2階の微分方程式の解には、勝手に定めてよい定数が2個現れることとなります。ここで、解を1つに確定するためには、2つの追加的な条件が必要となり、これは、異なる2つの変数で解（の候補）が取るべき値を指定することによって与えられるのが通常の場合で、この2つの（2つの、というのは、2階の微分方程式の場合ですが）

追加条件を「境界条件」と言います。

例として、具体的な経済モデルを考えます。ある個人が、各期の消費を巧く選んで、生涯効用を最大化したいと考えています。消費は勝手に選ぶことはできず、自分が各期に所有している資本に制約されることとなりますが、この制約条件は、消費と資本に関する1階の微分方程式で表わされます。一方、最大化のための1階の必要条件と呼ばれるものを求めると、消費と資本についての別の1階の微分方程式（オイラー方程式）が得られます。つまり、連立1階微分方程式が登場するのです。端折りますが、変数を1つ（例えば、消費）を消去することによって、単独の2階の微分方程式が残ります。境界条件の1つは、初期資本が外性的に与えられている、というものです。（生まれたときに、どれほど自分が富んでいるのかは、自身では選択できない。）ところが、ある時点でどれだけの消費をしなければいけないかについての特段の制約はないため、境界条件が1つ足りません。このときに、どうやって最適な消費（あるいは、資本）の経路を見つけるかというのが「自由境界問題」です。自由境界問題においては、境界が2つ与えられている問題と比べると、自由度が1だけ増えるため、その分、最大値がより大きくなります。以上で「自由境界問題」の説明は終了です。（長いな！）

「ソロモンの偽証」、小日向文世さん、田畑智子さん、黒木華さんといった錚々たる演技派俳優たちが、成島出監督の演出で（推測）あえて徹底して抑えた演技をしているため、主役は藤野涼子さんをはじめとする生徒役の子供たちであることが強烈にアピールされている。藤野さん以下、これに本当によく応えていて、彼らを観るための映画と言ってもよいでしょう。何が前篇と後篇の評価の違いなのか？ この差は、「決着を付けなくてもよい」という「前篇の持つ本来の性質」のみから来ています。これが言いたいのために、長大な説明が必要だったのです。ご苦労様、と自分に言いたい。

劇場で、前篇上映の直後に「後篇の予告編」が上映されたのですが、ここで泣いてしまいました。やべーと思い、周りを見回したら、結構みんなも泣いていて、ホッとしました。また、劇場を出たところで、作家の志茂田景樹氏を発見、彼も「前篇」を見に来ていたのです。いつもの通りの奇抜な衣装で、すぐに彼だと分かったのですが、映画の余韻に浸っていたため、驚きもしませんでした。むしろ、驚かない自分に驚いた。

大人の事情か何かで、本作、日本アカデミー賞で完全に無視されていました。まったくフェアではなく、もの凄く不満です。でも、一部の人たちの映画人としての矜持がそれを許さなかったのでしょうか、藤野さんだけは新人賞を受賞していました。(完全に推測)(20180216)

八日目の蝉

「ソロモンの偽証」を劇場で観た直後に、成島監督の代表作がこれであることを知り、ずっと見たいと思っていたのが、前段のBSプレミアムの直後にどうしても見たくなり、ダメもとでVODのラインナップを観てみたところ、あったのですよ、これが。即購入し、鑑賞。

井上真央さんと永作博美さんの真摯としか言いようのない演技で、直ぐに映画に没入。そ

の2人に加え、(失礼かもしれませんが)小池栄子さんの、スタニスラフスキも真っ青の信じられない演技!

「母娘」である永作さんと井上さんは、映画内で「共演」してない。意図してはいないと思いますが(意図していたら、成島監督、凄いです)、これは「ゴッドファーザーPARTII」のロバート・デ・ニーロとアル・パチーノ(こちらは役柄上は本当の親子)をどうしても思い浮かべずにはいられないため、「親子」とは何かを知らず知らずに考えてしまう。

後半、映画はロード・ムービーになります。意図してはいないと思いますが(意図していたら、成島監督、凄いです)、永作さんの道行は「砂の器」の加藤嘉さんと加藤剛さん(こちらも役柄上は本当の親子)をどうしても思い浮かべずにはいられないため、「親子」とは何かを知らず知らずに考えてしまう。

「親子とは何か?」を問いかける映画と言ってしまうとありきたりに聞こえますが、上述の3人の演技で、「ありきたり」を軽く超えてしまった。文句なしの★5つです。

舞台が小豆島に移ってからは、僕は泣き通しでした。(それにしても、よく泣く)それと、最後の写真館の田中泯さんは、反則だと思う。笑(20180216)

究極の宙ぶらりん(「スリー・ビルボード」)

「フランシス・マクドーマンド主演」の情報のみで鑑賞決定。そのほかの情報、一切不要。マクドーマンドさんというのはそれほどの女優です。(本作でも、やっぱりそうだった)

あえて言えばクライム映画。そして、マクドーマンドさんが本領を発揮するのはそのような映画です。レイトショーで鑑賞。翌日のこともあり(笑)、終了時間を確認して観たので、2時間弱の映画であることは分かったうえで観ている。終盤、気が遠くなるような展開に。体内時計は、ほぼ2時間が確実に経過したことを告げている。うーん、これは「決着を付けずに終わるパターン」の定石通りだな、と思っていると、やっぱり、そのように終わる。上述の「ソロモン」とは全然違います。この映画に後篇などはあり得ません。僕は嫌いではないが、これ、駄目な人は多いと思う。

映画の評価(★4つ)は、この結末とは無関係で、主演の3人(マクドーマンド、ウディ・ハレルソン、サム・ロックウェル)の演技は、絶対に観ておくべきだと思うから。ストーリーがあるような、ないような2時間を、全く飽きずに観れるのは、ひとえにこの名優たちのおかげです。

終わってから、本年度アカデミー賞のサイトを確認したら、3人ともノミネートされていた。納得。(20180219)

マクドーマンドさん、サム・ロックウェルさん、僕の予想通り、アカデミー賞を受賞しました。(20180323 追記)

偉大なる繰り返し(「パターソン」)

★4つ。目黒シネマのアンコール上映の最終日・最終回で鑑賞。混んでいて驚いた。これだ

け「目黒シネマ」のことを宣伝しているのだから、何か呉れても良いと真剣に思う。

本作、監督当てクイズ（笑）をすれば、まず9割は当たる。それくらい「ジム・ジャームッシュ感」満載の映画。特段変化に富まない毎日のエピソードを1週間分繰り返すだけ。でも、セリフが面白いので全く飽きない。主演のアダム・ドライバーも凄く良い。最後の最後に永瀬正敏さんが出てきたところで、不覚にも泣いてしまった。その意味でも、是非、同監督の「ミステリー・トレイン」を観てから本作を観てほしい。(20180323)

第〇次昭和史ブームのあっけない終焉：「ラストエンペラー」

自分の中での凄く盛り上がっていた「昭和史ブーム」（下の方を参照ください）が「ラストエンペラー」（ベルナルド・ベルトルッチ監督、ジョン・ローン主演、1987年）とともにあっけなく終了した。未見だったので、BDがこの夏に発売と聞いて早速購入して鑑賞。アカデミー賞作品賞を獲ったとは思えない出来栄え（評価：★★★☆☆）。とにかく長い。愛新覚羅溥儀の一生をすべて描くので、仕方がないとはいえ、長い。溥儀役の俳優だけで、世代別に4人くらい出てくる。よいところがないわけではない。溥儀の第1夫人役の女優さんは非常に上手だったし、戦犯収容所（共産党の再教育センター？）の人間的な所長の人物造形も悪くはない。でも、何を描きたかったのかがまったく分からない。史実の発掘？（溥儀は西洋の人たちにはそれほど有名とは思えない）。清朝最後の皇帝であった溥儀が、再び皇帝になりたかったがために、日本軍に利用されたように思わせて満州国皇帝に復位したことについての彼の葛藤？（皇帝になることを日本軍に強制されたと、溥儀が「虚偽」の証言を東京裁判で行ったことは、殊に有名。彼自身がそのようにのちに告白している。この映画も、このことに多少モティベートされて制作されていると思う。）とにかく長いので、映画の趣旨がよくわからない。

個人的に嫌だったのは、満州国の描写。映画全体から見れば、この部分がそれほど長いわけではないが、甘粕正彦役の坂本龍一がとにかく、下手。「戦場のメリークリスマス」より確実に下手になっている。ふつう、演技経験を積めば、多少は上手くなっていくものと思うが。

ミステリー小説に戻ろうか。(20180830)

夢の中で夢を見て、その夢の中でまた夢をみる：「インセプション」

ミステリー小説に回帰して、山田風太郎を固め読みしています。かれの短編に、「作中作中作」が出てくるのがあって、最後、このヒエラルキーを見事に回収しています。「作中作中…もの」の中でも出色の好編です。

待てよ、何処かで見たな、と思ったら、そう、「インセプション」（クリストファー・ノーラン監督、2010年）でした。ロードショー公開の時に、映画が終わっても、余りの凄さにしばらく席を立てなかったという当時の記憶が甦ってきました。早速、温存していたBDで8年ぶりに同作を鑑賞。

評価★★★★☆だったのですが、5点満点にしてもよいかも、というくらい凄かった。特に1度目に観たときには分からなかったところが本当に良くわかった。良くできているな。

冒頭、夢の中で相手の秘密を盗むこと（ディセプション）を生業にしているディカプリオの仕事を見せるシークエンス、ほとんど説明らしい説明はなく、そのため、このシークエンス（20分くらいか）、しばらく何が起きているのか全く分からず、しかし、分かった瞬間、猛烈な感動に襲われる。夢の中で、さらに夢を見させて（それだけ、より深く深層心理に潜航できるため、相手も油断し、アイデアが盗みやすくなるという理屈、だと思う。多分）頭の中にあるものを盗む。これ、分からないよなー。説明、ほとんどないし。僕の周りでも、このシークエンスであきらめて（笑）、爆睡モードに入った人が結構いた。これ、ノーラン映画の特徴で、好き嫌いがはっきり分かれる理由です。

ここで騙されかかった「世界の渡辺」が、逆にアイデアを植え付ける仕事をディカプリオに持ちかけるのが本編。渡辺謙さん、この映画では本当に良い役をもらった。日本人として、ノーランに感謝したい。

アイデアを植え付けられるターゲットがキリアン・マーフィーで、再見でわかったことだが、かれは「ダンケルク」で重要な役をやっていた（上で書いていたので参照ください）。一番浅い夢が10時間継続し、夢のハイアラーキーを下がれば下がるほど（上がれば上がるほど？）知覚する時間は長く感じる。その間、ゆっくりとアイデアを植え付ける。故に、10時間、不審に思わせることなくマーフィーを眠らせる必要があり、ニューヨークからロスまでのフライト中が適当だろう、と言うことになる。（行き先と出発地、まったく自信がない。とにかく、アメリカ国内間の10時間のフライト）物語のすべては、故に、このフライト中のこと。もう書いてしまうが、当初の予定では、夢の中の夢の中の夢で完結するはずが、想定外の事態発生で、もう一段階、さらに夢を見る必要が出来。夢の中の夢の中の夢の中の夢。うーん。気が遠くなる。しかも、驚くべきことに、ノーラン、この4つの異なるレベルの夢を同時に描く！！集団で同時に同じ夢を見るので、その集団を夢から覚ます役が必要で、各段階で、必ず一人は（夢の中で！）寝ないで起きている。2段階目で起きている役がジョセフ・ゴードン＝レヴィット。夢は、より上位の夢に制約されるため、しかも、上位の夢では全員が乗っているワゴン車が橋から落下しているために無重力、よって、このホテル内での、ゴードン＝レヴィットによる（残りの全員は寝ている）マーフィーの夢の中に存在している彼らの敵（プロジェクション）との格闘シーンは、全篇、ワイヤーワークによる（多分そうだと思う）とんでもなく奇抜なもの。ゴードン＝レヴィットはこの奇蹟的な演技でブレイクするし、この場面は、映画史に残る伝説のシークエンスになった。（泣くシーンでは全然ないが、ここで尾崎、感動のあまり号泣。）

2度見て初めて分かるところも多い。1段階目の夢でのマーフィーのキッドナップのシーン、いきなり、列車が暴走してきて、危うく轢かれそうになったディカプリオが、「こんな設定ないだろ！」と怒鳴るが、皆が（特に、夢を設計するアーキテクト役のエレン・ページ

が)「知らない。設計していない」と言うところがあるのだが、実はこれ、最後のところの重要な場面で列車が登場し、故に、ディカプリオの記憶が夢に反映されていたのだと分かる。この、実際の記憶(つまり、事実)が夢に反映されるというのは、この映画の肝で、全篇に亘ってやたらと登場するマリオン・コティヤールは、ディカプリオの記憶の中だけに存在していて、映画のリアル・タイムの場面では存在していない。(ただし、彼女がビルから飛び降りるシーンは事実の描写。ややこしい)

こうなってくると、当然、ディカプリオ以下、だれもがリアルとフィクションの区別がつかなくなってくる危険性がある。これを解決する重要なアイテムが、ディカプリオの場合は「独楽」で、独楽を回すことによってリアルかフィクションかを判断することになる。独楽が回り続けるならば、フィクションということ。これがラストシーンの独楽の意味だ。ここも、ちょっと微妙な感じで終わるので、ひょっとすると深読みする人たちもいるのかもしれない。僕にはその必要は全くなく、ここは当然、ああ解釈して、泣く。

脚本・監督・クリストファー・ノーラン。彼は間違いなく、「天才」の一人。その彼がアカデミー賞監督賞を(ノミネートはされながら)とることがないのは、彼の才能に対する嫉妬から来る一種の「いじめ」だと思う。僕も経験しているので、これは本当に良くわかる。笑(か?) (20180902)

完全な前言翻し：「2001年 宇宙の旅」

下欄(公理系ミステリー)でも書いたように、「2001年」は少々厄介な存在であった。「絶賛しなければならぬ感」が半端なかったからだ。前言を翻します。何の躊躇もなく、絶賛します!

何故、いまりバイバル上映するのだろうかという疑問に思っていたところ、公開50周年ということのようだ。(全く気が付かなかった。教えてくれた友人A氏に感謝。)最近、何故か自分の中でハチャトゥリアンとリゲティが盛り上がっていて、その関連で「2001年」のサウンドトラックを聴いたりしていたのだが(下欄、「ハチャトゥリアン」の項参照)、まさか映画そのものを公開するとは思っていなかった。相変わらず、「ツモ力」が半端ない。

なんで以前は、この映画を何とかして「解釈」しようとしていたのだろうか。おそらく、背伸びをして、自分を、自分以上の何者かに見せたかったのだろう。でも、解釈など全く不要。音楽と映像が信じられないくらいの高次元で融合した、飛びっきりの娯楽大作。観る側の変化(30年ぶりくらいで観ている)で、映画の印象がこれだけ違うのに驚く。「人生の黄昏」ともいうべき年齢で、本当に良いものを観させてもらった。

開始前(明かりがまだついているとき)のリゲティ(全篇、リゲティが炸裂している)、インターミッション、映画が終わって明かりがついてからも「ドナウ」が流れ続けているところなんか、初公開当時を再現したものだろう(推測)。109シネマズの憎らしい演出に脱帽。(20181030)

クラシックの名曲たちと映画

最近、どっぷりとクラシック音楽に浸っていて、でも、「映画好き+クラシック好き」な僕としては、これについて書かない手はないなということで始めます。大好きな曲と、それが使われている映画のシーンについてです。逐次、書き足します。

♣ベートーヴェン、交響曲第7番「第2楽章」

ミーハーで恐縮ですが、ベートーヴェンの全音楽中、最も好き。小学生くらいの時に観た「未来惑星ザルドス」(1974年、ジョン・ブアマン監督、ショーン・コネリー、シャーロット・ランプリング主演)で知る。この映画、相当Hな上に(小学生にはきつい)、話も全然理解できなかったが、最後のシーンでかかるこの曲が、映画の訳の分からなさとは渾然一体となり(良い意味で?)トラウマみたくなった結果、大好きな曲に。

ずっと後に、園子温監督「愛のむきだし」(上を参照)で、(洗脳された)満島ひかりさんが主人公の西島隆弘さんを(廃バス車両か何かの中で)「説得」にかかるシーンで、執拗にこの曲が流れるが、ここ凄いですよ。(20180331)

今更のように「英国王のスピーチ」(2010年。監督:トム・フーパー、主演:コリン・ファース、ジェフリー・ラッシュ)を観た。映画の中の一番大事なシーンで、「第2楽章」が流れる。油断していた。そんな話、聞いていなかったの。(こういうのって、噂になったりして、知っていたりするもの。)その直後、ベートーヴェン、ピアノ協奏曲第5番の(あまりにも美しい)第2楽章が少し流れる。これは、「国王=皇帝」繋がりと思われる。なお、この映画のガイ・ピアース、相変わらず良かった。(こちらも、出演しているとは思ってなかったの、驚いた。)(この段落、20180624 追記)

♣ヨハン・ゼバスティアン・バッハ、管弦楽組曲第3番第2曲(いわゆる「G線上のアリア」)

グスタフ・マーラーの交響曲第5番第4楽章「アダージェット」と並んで、全音楽中、最も好き(そこまで言うか?)。故に、使い方を間違えると大変なことに。成功例を2つ。

(その1)伊丹十三監督「お葬式」(1984年)で、お葬式の準備をしている様子を、記録のために8ミリビデオで撮影するシーンがあり、ここだけ白黒映像になる。このシーンを撮影しているのは写真家の浅井慎平さんで、このときにこの曲がかかる。この映画、伊丹さんではなく浅井さんが撮ったこのシーンを最後まで越えられなかったため、非常に惜しい結果となってしまった。逆に言うと、このシーンが良すぎた。

(その2)「セブン」(上を参照)の深夜の図書館のシーン。“Gentlemen, gentlemen, I’ll never understand. All these books... a world of knowledge at your fingertips. What do you do? You play poker all night.”(モーガン・フリーマン)“Hey, we got culture.”(警備員#1)“Yeah, we got culture coming out our asses.”(警備員#2)“All right. How’s this for culture?”(警備員#3)で流れ始める。コピーを取るフリーマン。さらにそのまま、他のシーンにかぶさってしばらく流れ続ける。ここ、涙が出るほど良いのですが、「観て」としか言いようがない。

「アリア」と「アダージェット」の失敗例の死屍累々、山ほどありますが、いちいち書き

ません。(20180331)

♣ ドミートリイ・ショスタコーヴィチ、ピアノ協奏曲第2番

ショスタコーヴィチとプロコフィエフは、同じ旧ソビエトの作曲家として、一緒に論じられることが非常に多い。(ここでは一切論じない。)プロコ(マニアは、そう呼ぶ)は大好きで、交響曲も協奏曲も随分と聴いたが、ショスタコ(マニアは、そう呼ぶ)は高校生の時に初めて聴いた交響曲第5番(「革命」)のインパクトが凄すぎて、それ以来、「革命」以外は全く聴かないという状態に。

「ブリッジ・オブ・スパイ」(映画については、上を参照)で、トム・ハンクスとマーク・ライランスが2人で話すシーンでかかる曲、ショスタコの曲であることしか映画は教えてくれない。でも、映画もこの曲もあまりに良いので、早速ネットで調べてみると、ピアノ協奏曲第2番の第2楽章だと分かりました。いまもCDで聴きながら書いているけれど、なんてよい曲なんだ?クラシックはかなり多く聴いているつもりだけれど、まだまだ知らない名曲が数多あり、驚く。(ショスタコのピアノ協奏曲は単に僕が知らなかっただけかもしれませんが。)

別件ですが、昨日、スピルバーグ+ハンクスの「ペンタゴン・ペーパーズ」を凄く期待して観に行ってきました。最強のこの2人で、これだけ駄目な映画ができてしまうことに驚いた。かなり落ち込む。2時間かけた「大統領の陰謀」の予告編。最後のシーンは、同作の冒頭と同じ。当然故意にだと思うが、そもそも「大統領の陰謀」を観ていないと、そのことにも気付けない。(20180404)

♣ ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト、交響曲第25番ト短調「第1楽章」

言うまでもなく「アマデウス」(1984年。ミロス・フォアマン監督)のオープニングで流れる有名曲。「有名」と言っても、僕がこの曲を知ったのは同映画で、有名になったのもこの映画のおかげだと思う。モーツァルトの交響曲にはト短調が2曲あって、もう一つは、これはもう本当に有名な第40番。でも、この辺りには深入りしません。詳しい人は僕よりも遥かに詳しいので。(例えば、友人のTさん。彼は大のクラシック好きではあるものの、ほとんど、モーツァルトとベートーヴェンしか聴かないという。僕は彼にジャズの聴き方を習いました。モーツァルトとジャズ、通じるものがあるのかもしれない。ジャズ・ピアニストの小曾根真さんが、最近、クラシックコンサートでモーツァルトを弾きまくっています。)

僕のモーツァルトとの非常にざっくりとした(そして、多分、誤った)理解は、「人間離れ」した天才が、貧窮のちに余りにも「人間臭く」なって死んでいく、というもの。25番とか、(見た訳ではないので真実は分からないけれど)天才が何の苦労もなく、一瞬で書き上げたような曲。最後の3つの交響曲、第20番以降の最後の7つのピアノ協奏曲は、(すごく陳腐ですが)人間の悲しさ、美しさに満ち溢れていて、ベートーヴェン、そして、ロマン派へと自然に連なっていきます。「アマデウス」の最後、絶頂を極めたモーツァルトの遺体が集合墓地にぞんざいに投げ込まれるシーンで流れる「ピアノ協奏曲第20番第2楽章」の「人間的」な美しさと言ったら。(20180413)

♣ アラム・ハチャトゥリアン、バレエ音楽『ガイーン』より「ガイーンのアダージョ」

この曲を暫く前に聴いたとき、凄く良い曲であることに感激し、ハチャトゥリアンは「知られざる名曲」の宝庫であると再認識すると同時に、強い既聴感（「既視感」を真似た僕の造語）を感じた。その時の結論は、リドリー・スコット監督の「エイリアン」（SFホラーの金字塔）のテーマ曲（ジェリー・ゴールドスミス作曲。映画音楽の金字塔）にとってもよく似ているので（もちろん、ハチャトゥリアンが先）、そう感じただけ、であった。

話は少し飛ぶ。リゲティをずっと聴きたいと思っていて（リゲティというのは、リゲティ・ジェルジュ・シャンドルのことで、現代音楽の作曲家。現代音楽一般は全く聴く必要はないが、リゲティだけは別という説がある）、でも敷居が高く、何を聴いてよいかも分からず途方に暮れていたところ、彼の曲が「2001年宇宙の旅」（1968年。スタンリー・キューブリック監督）で使われていたことを知り、同映画のサウンドトラックCDがあることが分かったために早速アマゾンプライムで購入して聴いてみた。

同映画では、リヒャルト・シュトラウスの「ツァラトストラはかく語りき」や、ヨハン・シュトラウス2世の「美しく青きドナウ」は死ぬほど有名であるが（実際に、CDで改めて聴いてみても、この2曲を使ったのは、キューブリック、やっぱりすごいと思わざるを得ない）、これ以外に、何処かで聴いたことのあるとても良い曲があり（リゲティではない。笑）、ジャケットで確認したところ、「ガイーンのアダージョ」でした。既聴感の原因がようやくこれでわかりました。そもそも、僕が同曲を聴いたのは、西本智実さん指揮のポリショイ響のCDで、このCDは、ハチャトゥリアンの「仮面舞踏会」（浅田真央さんで有名になった）など、ロシアの作曲家の名曲集になっていて、さすがポリショイ響の演奏というだけあって、凄く良いアルバムです。超お薦め。（しかし、2曲だけラヴェルが入っていて、CDのタイトルは「ボレロ」。涙）「ガイーンのアダージョ」が収録されているのは、これは「2001年」のおかげで有名な曲だから、という理由があったのかもしれません。

なお、僕の学生時代には、映画好きは「2001年」を崇め奉らなければいけない、という暗黙の掟があり、とても閉口した。「2001年」、もちろん傑作ですよ。でも、例えば、同じキューブリックならば、「時計じかけのオレンジ」の方が主観的にはずっと良い。（20180706）

♣ ヨハン・セバスチャン・バッハ、ピアノ協奏曲第5番「第2楽章 ラルゴ」

映画「スローターハウス5」（ジョージ・ロイ・ヒル監督、1972年）の冒頭で流れる。（その他、作中でも数回、円盤が飛来するシーンでかかる。）凄く昔、アメリカ留学中に観たのだが、英語が分からないせいで、時間の経過を前後バラバラにしている（back and forth）こと以外、映画もさっぱり分からなかった。観終わってから、「時間経過をバラバラにすることなんて、福永武彦がとっくの昔にしているぜ」と、情けない捨て台詞を残して会場の大講義室を後にしたことを覚えている。

その後、カート・ヴォネガット・ジュニアの有名な原作を読み、それがそれほど面白くないことを発見し、ヴォネガットはドレスデン空爆のことが書きたかったのかな、などと思ったりした。なお、ヴォネガットは皮肉屋で、「そういうものだ（So it goes.）」というフレー

ズを多用している。

そして、つい最近、BS プレミアムで放送したのを録画しておいた映画版を凄く久し振りに（留学以来だ）観た。いろいろと発見があり、とても面白かった。冒頭、主人公が雪で覆われたドイツの戦場を彷徨うシーンでバッハ（その他の使用曲も含め、グレン・グールドの演奏。タイトルで、「音楽：グレン・グールド」と出る）が流れるが、ここが感動的で、少し泣く。（このシーンは、記憶から完全に欠落していた。）その他、ジョージ・ロイ・ヒルの演出は、話そのものは原作に忠実であるものの、原作の皮肉な調子を一切排除して、感動的な物語に仕上げている。（コミカルなシーンは多々あるが。）特に、小説と映画では、重要な登場人物である「ダービー」の印象が全然違う。映画、良かった。

早速、グールドの CD を購入し、ピアノ協奏曲第 5 番を聴きながら書いているが、相変わらず、グールドの歌がバリバリに入っている。気持ちは凄くわかる。（20180910）

♣ モーリス・ラヴェル、左手のためのピアノ協奏曲

昨年末くらいから、憑りつかれたようにラヴェルを聴いている。特に、ピアノ曲「夜のガスパール」は、最近は毎日のように通勤の運転中に聴いていて、第 3 曲の「スカルボ」のところでは、車の平均速度が数キロ増しになることは言うまでもない。「左手」は、そんなラヴェルの曲中、最も好きなもののひとつで、ライブコンサートでも何度も聴いている。

この曲、ジャン＝リュック・ゴダール監督「パッション」（1982 年）の冒頭、大空の飛行機雲のシーンで感動的に流れる。1980 年代、ちょっとハイブローな映画を専門に上映する「ミニシアター・ブーム」というのがあった。その草分けが「シネ・ヴィヴァン六本木」だ（1999 年閉館）。僕の世代は、この名前を聴くと少し涙ぐむので、年齢を推理する上で、この劇場名はそのためのとても有効な手掛かりとなる。「シネ・ヴィヴァン六本木」の柿（こけら）落しこそ、何を隠そう「パッション」であった。ミニシアターでゴダールを観る、なんというスノッパな響き！当時（今もだけれど）、トリュフォーに心酔していた僕にとって、「ヌーベル・バーグ」のもう一方の旗手であるゴダールは初体験であり、ラヴェルで始まり、イザベル・ユベール、ハンナ・シグラといったヨーロッパの大女優達の登場に、僕の期待はいやが上にも高まらざるを得なかったのだった…。

で、どうなったかというと、1 時間も経過しない段階で、僕の心の内では「早く終われコール」が鳴り響く結果となった。トイレに行きたくなってきたことも、当然これに拍車をかける。話がよく分からない。難解なのでは、ない。レンブラントなどの有名絵画（もちろん、静止画として）を、俳優たちを使って忠実に再現するというをしている映画クルーの話である。何を指して、これをしているのかは分からない。そこに、何かしらドラマが起きている（ような）のだけれど、特段の感動はない。さらに、ゴダール得意の（このことは当然、後で知ったことだが）、「台詞ずらし」があちこちで起こる。（「台詞ずらし」というのは、映像と音がずれることをいう。もちろん、故意にやっている。）それが、よくわからない感を加速する。かなり厳しい「ゴダール・デビュー」となってしまった。

その後、ゴダールはいくつか観たが（「パッション」は、なかったことにして）、「勝手に

しやがれ」(1959年)なんか、非常に良い。ジーン・セバーグはとても魅力的だし。「台詞ずらし」もあるが、これがゴダールの「例のあれ」だな、と分かっている分には、斬新だな、とさえ思える。「パッション」では、映画館の設備のボロさが原因という疑念を払拭することは、ゴダール初見の僕には不可能だった。

おそらく、「パッション」のDVDなりBDなり、出ているのだろう。買って、何十年ぶりに観てみるか。ウーン、その勇氣はないな(笑)。(20180928)

♣ フィリップ・グラス、「コヤニスカッツィ」

つい先日、車の運転中になんとなくNHK・FMの「ベスト・オブ・クラシック」を聴いていたら、グラスの「コヤニスカッツィ」から、「ヴェセルズ」の演奏・合唱です、とって同曲が流れた。懐かしいなー、と思って聴いていたら、これがとても良いのだ!

では、教えて差し上げよう。「コヤニスカッツィ」というのは、ゴッドフリー・レッチョ監督のドキュメンタリー映画(1982年)で、上記の「シネ・ヴィヴァン六本木」で、「パッション」の次に上映されたものなのだ。ドキュメンタリーといっても、何かストーリーがあるわけではなく、色々な映像をグラスの音楽と流す「環境映画」と言うべきものなのかもしれない。(うまく説明できません。おそらく、あちこちで論評されているはずです。内容については、そちらをご覧ください。)

今回、音楽(音楽だけ)を聴いてみて、これはむしろ音楽として(映像なしで)聴くべきものなのではないかと強く感じた。もう、グラスの「コヤニ」全曲を改めて聞くしかない、と思い、早速某ネット通販で即購入、聴いてみた。確かに80年代の曲、と言われればそうなのだが、今聞いて違和感ゼロであるというか、今聴いて凄さがわかるというべきか。(映画を観たときには、音楽のこの凄さにはまったく気が付かなかった。不覚というより、やはり、映像と併せて聴いたからだと思う。)それとも、時代が一周したのか?

全く知らずに聴くと、ハンス・ジマー(ノーランの「ダークナイト三部作」など)か?と錯覚する人がいても全然不思議ではない。それほど凄い。長生きはしてみるものだ。(20180928)

♣ エドワード・ウィリアム・エルガー、チェロ協奏曲

名曲中の名曲。今、ジャクリーヌ・デュ・プレのCDボックス(全17枚)を聴いていて(ほとんど、ライフワークと言える)、その一枚目の最初の曲。「ほんとうのジャクリーヌ・デュ・プレ」(1998年)で、ご本人の演奏が何度も何度も流れる。随分前に観たこの映画のジャクリーヌ、相当凄くて、かなり引く。夭逝した天才チェロリストを描いた映画だけれど、公開されてすぐに、根も葉もない中傷に満ちていると、友人たち(著名な音楽家たち)から制作側に強い抗議があった。邦題(原題はHilary and Jackie)も怒りに油を注ぐ。個人的には、映画は無視して、彼女の演奏に酔いしれたい。一応、映画で使われたので、ここに書きました。(20181107)

号泣必至の曲ベスト10

名曲はそれこそ数えきれないほどあるが、その中に、何故か「泣けて泣けて仕方のない曲」というのがある。その曲が個人的なある記憶とリンクしていて、その結果泣けるというわけではなく、その曲本来の持つ何かが我々の琴線に激しく触れるのだろう。ユングの「アニマアニムス」のようなものか？（以下、順位は常に変動します。）(20190109)

第1位：ショスタコーヴィチ、ピアノ協奏曲第2番 第2楽章

第2位：ブラームス、交響曲第4番 第1楽章の冒頭。いきなり泣ける。僕だけではない。ある友人と完全に意見が一致した。

第3位：ブラームス、交響曲第3番 第3楽章

第4位：ブラームス、ピアノ協奏曲第2番 第2楽章。ブラームス、強し。

第5位：ラヴェル、ピアノ協奏曲 第2楽章

第6位：J・S・バッハ、ピアノ協奏曲第5番 第2楽章

第7位：ショパン、ワルツ 作品69-1（いわゆる「別れのワルツ」）

第8位：ショパン、マズルカ 作品17-4

第9位：ショパン、バラード第1番

第10位：シューマン、ピアノ協奏曲 第1楽章の冒頭。これは「ウルトラセブン 最終話」を想起させるからかもしれない。この辺り、研究が待たれる。

以下、しばらくミステリー関連

ミステリー備忘録：最近読んで、非常に印象に残ったものだけ（残らないものも山ほど読んでいる）、メモしておきます。

・トルーマン・カポーティ「冷血」（下に書いた「落日燃ゆ」にも通じるが、淡々と描くことによる効果を痛感）

・ホルヘ・ルイス・ボルヘス「伝奇集」（ありもしない本からの引用で構成される小説の嚆矢とのこと。これって下欄、公理系ミステリーのところで書いた「信頼できない語り手」にあたるのではないか？要考察）（以上、20181107）

ミステリー読み返し：大昔に読んだミステリー、書架にひっそりとたたずんでいるので幾つか読み返してみた。その感想です。

・ヴァン・ダイン「僧正殺人事件」：見立て殺人であること以外、ほとんど記憶になかった。全く面白くなかった。不思議。

・イーデン・フィルポツ「赤毛のレッドメイン家」：全く内容を覚えていなかった。信じられないくらい、つまらない。不思議。（以上、20190204）

本格ミステリーにおける「古典」について。

ミステリー小説はリサーチ・ペーパー（研究論文）と非常に似たところがあって、先行する小説を前提に書かれていることが多い。したがって、過去の有名な小説（いわゆる「古典」）を読んでいないと全く面白くない（作者の意図が不明）ということが時に起こる。義務的に読んでも全然つまらないので、最低限、読んでおいた方が良いと思われるものを以下に挙げておく。

- ◆エドガー・アラン・ポー：「モルグ街の殺人」（「意外な犯人」ジャンルの嚆矢、というか、歴史上、最初に書かれた本格ミステリー小説とされる）
- ◆アガサ・クリスティ：「そして誰もいなくなった」（「絶海の孤島 あるいは 吹雪の山荘」ジャンルの嚆矢）、「ABC 殺人事件」（「ミッシング・リンク」ジャンルの嚆矢）、「オリエント急行の殺人」（「ワトソン探し」ジャンルの嚆矢）、「アクロイド殺し」（「??」ジャンルの嚆矢）
- ◆エラリー・クイーン：「エジプト十字架の秘密」（「首のない死体」ジャンルの嚆矢。多分）、「Yの悲劇」（バーナビー・ロス名義）。クイーンは「読者への挑戦状」でも知られる。
- ◆ガストン・ルルー：「黄色い部屋の秘密」（「密室」ジャンルの嚆矢）
- ◆ヴァン・ダイン：「僧正殺人事件」（「見立て殺人」ジャンルの嚆矢）

好きな作家（順不同）

- 夏樹静子さん（慶應義塾大学文学部英文科卒業。文学部はこのことをもっと宣伝した方がよいと思う）マスト（「必読」の意。以下、同じ）：第三の女、77 便に何が起きたか（短編集）、Wの悲劇
- 連城三紀彦さん。マスト：戻り川心中（短編集。表題作「戻り川心中」はマスト中のマスト）、夜よ 鼠たちのために（短編集）
- 島田荘司さん。マスト：占星術殺人事件、斜め屋敷の犯罪、異邦の騎士、龍臥亭事件（特に、津山事件のくだり）
- 三津田信三さん。マスト：作者不詳 ミステリ作家の読む本、シェルター 終末の殺人、幽女の如き怨むもの
- 岡嶋二人さん。マスト：そして扉が閉ざされた、クラインの壺
- 高木彬光さん。マスト：成吉思汗（ジンギスカン）の秘密、人形はなぜ殺される、妖婦の宿（短編。「迂闊」↓参照）
- 貴志祐介さん（京都大学経済学部卒業。貴志さんを輩出したという一点で、もう絶対に京大経済学部には勝てないと思う。他大学に所属する人間としては絶望的な感想ですが。それくらい、好き。別欄参照）

読書ガイド（貴志祐介編）

マストの方は、自分が読んだ順番で書きます。

- ◆「悪の経典」

海外出張時に、成田空港の書店で、「担任教師がサイコパス」という週刊誌の惹句に惹かれ、発売直後の上下 2 巻のボリュームな単行本を飛行機搭乗前にゲット。飛行機の行き帰りと滞在中のホテルで、一気に読み。三池崇史監督の映画（特に、宣伝）、駄目でしょ。あの落ち（といっても、上巻の最後辺りからなので、長大）を知らずに読む幸せを人類から奪い去った罪は、相当重い。

◆ 「ISOLA」

「悪の経典」で迂闊にも貴志さんを初めて知り、廻りの読書。Isola… の意味、最後まで絶対に気が付かないと思う。

◆ 「黒い家」

廻り。完成度では、貴志祐介史上、最強。読み始めて直ぐに、「マツコ・デラックス+でんでん」の W 主演で、脳内で勝手に映画化しながら読んだ。再映画化、希望。

◆ 「クリムゾンの迷宮」

文庫化されて平積みされていたのをゲット。いわゆる「バトル・ロワイヤル系」。あっ、そもそも「バトル・ロワイヤル」について書く必要がありますね。批判されましたが、個人的には何故だかまったく意味不明。別の機会に譲ります。

◆ 「ダークゾーン」

文庫化されて平積みになっていたのをゲット。上下 2 巻。2017-2018 の年末・年始はこの本のおかげで、とても贅沢かつ幸せに過ごせました。個人的には、貴志祐介さんの最高傑作。今年の目標は「軍艦島に行く」で決定です。

以上 5 冊は、マストです。その一方で、意見は分かれると思いますが、貴志さんの密室もの（「硝子のハンマー」「狐火の家」「鍵のかかった部屋」「ミステリークロック」）、志は凄く高いのですが、正直、面白みに欠けます。密室を提供して、解いてみせるだけ。ストイックです。それは全然よいのです。でも、大山誠一郎さん（「密室蒐集家」はマスト）のような「密室の凄さ」がありません。多少の味付けとして、コメディータッチなのですが、これも個人的には、不要。ごめんなさい。これだけ広い分野（ホラー、SF、本格）で書けることだけで凄いの、何か物足りないというのは、凄く贅沢な感想というのは分かっているのですが。

(20180118)

♥ 最近の「号泣」

冲方丁さん「十二人の死にたい子どもたち」（「蜜蜂」↓と競わなければ直木賞を獲っていた）
恩田陸さん「蜜蜂と遠雷」（ミステリーではありません）

古野まほろさん「禁じられたジュリエット」（ある意味、卑怯。これを読んで泣かないミステリー好きはいない）

♠ 最近の「迂闊」（読んでいべきが、読んでいなくて、最近読んで、なんでこんなに凄い

のを読んでいなかったのだろうと驚嘆したもの)

高木彬光さん「妖婦の宿」

横山秀夫さん「第三の時効」

広瀬正さん「マイナス・ゼロ」。とんでもない離れ業。広瀬さんは、小松左京さんや星新一さんと比較して、あまり知られていないと思うが（実際、僕も知らなかった）、これを読むと、不可解の一言に尽きる。

アーサー・C・クラークさん「幼年期の終り」。これも別欄で詳述。

人生を振り返る（笑）：ミステリーとの出会い。

これまでに「幸運だったな」と思うことは山ほどあるけれど、その中でも、ミステリー小説と出会えたことは本当に幸運だったと思う。これだけでも、生まれてきた価値はある。小学生のときに近所の図書館で見つけて読んだ、ジュブナイル版（子供用に平易に抄訳した）クイーンの「エジプト十字架の秘密」と（こちらはガチの翻訳の）ポーの「黄金虫」（誰が何と言おうと、「コガネムシ」ではなく、「オウゴンチュウ」と読む）の2冊は、その後の自分に大きな影響を与えた。余談だが、「エジプト十字架」でクイーンが用いたプロットに「バールストーン先攻法」という名前があることを最近知り、感動した。

しかし、本当に幸運だったのは、中学1年という多感な時期に、「横溝ブーム」と呼ばれる社会現象が起きたことである。「犬神家の一族」を皮切りに、横溝さんの小説はほとんどすべて読んだ。やはり、一番記憶に残るのは「犬神家」に登場した、犬神佐兵衛翁の、いわゆる「血を吹く遺言状」である。「ひとつ……犬神家の全財産、ならびに全事業の相続権を意味する、犬神家の三種の家宝、斧（よき）、琴（こと）、菊（きく）はつぎの条件のもとに野々宮珠世に譲られるものとす」で始まる遺言状の内容は、その後、研究者を志すことになった自分にとって、研究にとって最も重要な2つのこと、「論理整合性」と「驚き」を教えたくれた。現在、研究論文を執筆するときに常に心掛けていることは、犬神佐兵衛翁の遺言状のような論文を書く、ということに尽きる。

（続きは、気が向いたときに書きます）

刑事コロンボ（随時更新。何も見ないで、どこまで書けるかに挑戦。笑）

吹き替えは好きではないのですが、これは唯一にして、偉大なる例外。小池朝雄さんのおかげで、このドラマシリーズは、テレビドラマの金字塔になった。冗談では全くなく、小池さん、確実に国民栄誉賞だと思う。ということで、申し訳ないのですが、石田太郎さんになってからはカウントしません。（声優としてではなく、俳優としての石田さんはとても好きです。）

これだけの粒揃いの全エピソードの中で、一番好きなエピソードは何？と聞かれても全く迷わないんだな、これが。「殺しの序曲」の一択。無名時代のジェイミー・リー・カーティスさん（初代「B級ホラーの女王」。2代目は、メアリー・エリザベス・ウィンステッドさ

ん) が出演しているのを発見。でも、これが理由ではないです。秀才ならば絶対に「自白」せざるを得ないコロomboの最後の詰め、たまらない。僕も秀才なのでよくわかる。笑。
(20180119)

“Peter Falk as Himself” (ベルリン・天使の詩)

ヴィム・ヴェンダース監督は、アメリカ映画・ドラマが余りにも大好きで、それで撮ってしまったのが「パリ、テキサス」であることは有名です。アメリカ人監督によらない、余りにもアメリカ映画的なアメリカ映画として。(別欄で書いた、余りにもアメリカ映画的な、どちらかという脇役専門のイメージがあるハリー・ディーン・スタントンさんを主演に起用した。) 同作の準主役がディーン・スットクウェルさんで、彼は「刑事コロombo」の常連です。(例えば、「歌声の消えた海」。ゲストスター(つまり、犯人役):ロバート・ヴォーン(!)。このエピソード、大好きです)

このいぶし銀(笑)のような配役、どうしてか? ヴェンダース監督に訊いたわけではないのであくまで推測ですが、彼にとって、アメリカ映画(ドラマ)イコール「刑事コロombo」なのです。この点で、彼と僕は完全に同意見です。よかった。ついに彼は、「ベルリン・天使の詩」でピーター・フォークさんを「ピーター・フォーク」として起用します。子供たちの「コロomboだ!」、日本もドイツも全然変わらない。“Dedicated to all the former angels, but especially to Yasujiro, François and Andrej”. これを最後に出すなんて、卑怯。白馬の騎士がどうこうよりも、最後の献辞で、この映画は不滅になった、と思う。(20180121)

ようこそ。ビューティフルワールドへ。

「女流ミステリー作家」なる呼称が許されるならば、それは、山村美紗さん、夏樹静子さんから始まって、高村薫さん、宮部みゆきさんを経て、恩田陸さん、桜庭一樹さん、そして、辻村深月さんへと続いていくのだろう。(年齢順に書くとすれば、です。あっ、年齢はあくまで推定です。) 第1世代、第2世代、第3世代と無理矢理書くことにすれば、僕が世代で言うと、第2世代と第3世代の間に属するためか、第3世代の方々の作品は、本当に女性的でいいなあ、という感想を持ちます。(これ、不適切な感想かもしれませんが。お許してください。) 例えば、高村作品、作者を知らずに読むと、作者は男性だと信じる人が多いと思う。もちろん、それが悪いわけでは当然なく、高村薫『照柿』は僕の全読書歴で十指に入る大傑作です。

という訳で(どんな訳だ?)、第3世代の皆さんの、「女性的でいいなあ」と僕が感じた作品をそれぞれ一点ずつ挙げておきましょう。恩田陸『ロミオとロミオは永遠に』(各章の表題が映画のタイトルになっている。第16章は「アメリカの夜」。もう、これだけで、選ばないわけにはいかない。)、桜庭一樹『赤朽葉家の伝説』、辻村深月『冷たい校舎の時は止まる』。
(20180624)

（未完）「神々の乱心」

大清張（松本清張さんのこと）の遺作が本作であることを知らず、下巻の最後の方になって、「ひょっとすると？」と思って読んでみると、最後に（未完）の2文字。遺作であったことも知らなければ、未完であることも知らなかった。（最近のEテレ「100分de名著」で初めて知って、それで遅ればせながら読んでみた。）なんでこれまでこんな大事なことを誰も教えてくれなかったのだろうか？（ちなみに、僕が「大〇〇」と呼ばせていただくのは、大清張、大乱歩、そして、大横溝だけです。大正史とならないのは、そこはご愛嬌で。横溝正史さんについては、つい最近、信じられない感動的な出逢いがあり、この方々との岡山での邂逅については、別建てで書かせてほしい。）

「神々の乱心」、大清張の最後を飾るにふさわしい大傑作です。（これも、僕が言うまでもなく、常識だったのでしょうけれど。）驚いたのは、新本格を先取りするようなトリッキーな叙述方法。「清張節」と僕が勝手に呼んでいる、清張さん独特の、探偵（刑事）がこれまでに分かったことを読者にもよく分かるように主観的に整理してみせる場面（場合によっては箇条書きすら使う）も何度も何度も繰り返して、くどいほど多く出てくる。うーん、分かり易い！

僕的には、清張さんと言えば、何と言っても絶対に「日本の黒い霧」ですが、こんな傑作があったことを初めて知って（関係者にとっては常識だったのでしょうが）、大清張の奥の深さを痛感しました。（20180630）

「昭和史発掘」

「神々の乱心」読了の勢いを駆って、未読であった「昭和史発掘」全9巻を本日読了。かなりの猛スピード（幾日も徹夜も含む。こういうことをするから体調がすぐれなくなる。反省）で一気読みした。田中義一内閣成立前夜の昭和元年からはじめ、2.26事件の判決（昭和12年）まで、退屈することなく読ませるあたり、大清張の面目躍如。（余談ですが、プラタモリ・萩編で、案内人の方が、「萩出身の総理大臣は4人もいる。分かりますか？」とタモリさんに訊いたところ、伊藤（正確にいうと、生まれは萩ではない）、山県、桂までは、さすがにタモリさん、直ぐに出たのですが、最後の一人がわかりませんでした。案内人の方が、「あと一人は田中義一です」と言ったところ、タモリさん、「アー、田中義一さんね」と言っていました。タモリさん、絶対に田中義一そのものを知らなかったと思う。リアクション、もの凄く嘘っぽかった。僕はタモリさん、大好きですが）特に、2.26事件については、後半5巻全部を使い、非常に詳細に記述されている。

昭和史前半って、凄く暗いので敬遠しがちですが（暗殺とかが非常に多い）、飽きずに読めました。しかし、これは大の歴史好きの僕が言うことで、必ずしも万人にお勧めできるわけではない。（2.26事件など、一次資料に直接当たり、もはや優れた研究論文と言っても全然過言ではない。その分、他の大清張のミステリー群とは印象はかなり違う。もちろん、通じるころは多いと思うが）

惜しむらくは、太平洋戦争の直前まで書いてほしかった。同戦史については、映画などで知ることができる（実際、かなり知っていると自負している。爆）必見作を3つだけ挙げるとすれば、「日本のいちばん長い日」（岡本喜八監督、1967年。2015年の原田真人監督版ではない。これは非常に大事）、「東京裁判」（ドキュメンタリー、小林正樹監督、1983年）、「ゆきゆきて、神軍」（ドキュメンタリー、原一男監督、1987年）あたりか。戦後史だと、やっぱり大張の「日本の黒い霧」。

今日から安眠できそうです。（20180730）

「自ら計（はか）らわず」：第〇次昭和史ブーム

この季節になったからというのではなく、上で書いた「神々の乱心」を切っ掛けに、極私的に第〇次昭和史ブーム（第4次くらいか）に突入した。「昭和史発掘」を経て、「日本の歴史・24巻・25巻」（中公文庫）を再再読、映画「日本のいちばん長い日（岡本版）」「東京裁判」を見直し、未読であった城山三郎著「落日燃ゆ」を昨日、読了した。（日本の歴史第25巻は、バランスよく、本当に良く書いていると思う。「解説」によると、林茂編ともいうべきチームワークによるものとのことであるが、故に、特定のイデオロギーに偏らない好編になったのだと思う。これに対して、解説の「反動史観」には失笑した）

広田弘毅についてはよく知っているつもりで、「落日燃ゆ」についても、ドラマなど、関連するものを多く見ているので、別に原作は読まなくて良いだろうと思っていたのだが、魔がさして(?)読んでみる気になった。読んで本当に良かった！最後の3章は東京裁判が舞台になるが、この辺りから号泣しながら読んだ。

映画「東京裁判」最初の方、被告の罪状認否のところで、全員が無罪を主張したのだが、ナレーターの佐藤慶さんが、「ここで全員が有罪を認めれば、日本人にだけはわかる何事かを残し得たであろう」という或る人の（この罪状認否に対する批判的な）意見を紹介した後、実はこれは必ずしも正しくはなく、被告のあるものは自分の無罪を主張することに肯んぜず、これを拒み、「あくまで形式だけだから」と説得する弁護団をてこずらせたとある。映画では「ある被告」としか言わなかったが、これは広田であった。

また、映画の最後、各被告への判決言い渡しの時、広田が「絞首刑」（death by hanging）と聞き、全くうろたえず、その後ある方向を向き視線を交わすシーンがある。映画では説明は全くないが、これは、裁判の日には、必ず記者席最前列に傍聴に訪れていた2人のご令嬢に対する目礼であった。これもなんとなく気が付いてはいたが（お二人の傍聴については映画で説明されている）、「落日燃ゆ」で正しいことがわかった。

日本の戦争犯罪追求の先鋒となったキーナン首席検事（米国）でさえ、広田の死刑判決を「馬鹿げた判決。最悪でも終身刑だ」と言ったこと、他の死刑になった被告の死刑判決については、賛成7、反対4であったの対し（判事団は連合国を代表する11人からなる）、広田のそれは、賛成6、反対5と、僅差であったことなど、映画では描かれなかったことも小説からは分かる。

ドキュメンタリーとは言っても「東京裁判」は映画であり、演出はある。また、必ずしも、映画は広田擁護の立場を取っているわけでもない。しかし、映画を観ている人が「落日燃ゆ」を読むと、得心のいくことが多いのではないだろうか。(逆でも)

(なお、「東京裁判」は5時間の映画です。全く退屈しませんが、一応、言っておきます。また、映画の成功は、その多くを佐藤慶さんのナレーションに負っています。大河ドラマ「草燃える」(1979年)での比企能員(ひき・よしかず)役(まあ、悪役の種類)以来、佐藤慶さん、大好きです。ウーン、マニアック過ぎるな)

言い古されたことなのだと思いますし、同書の解説にも書いてあることですが、「落日燃ゆ」が感動的なのは、一切、情緒的な記述を排していることによります。極力、事実のみに基づき、感傷的にならない。小説には、東条英機に対する(広田による、多少の恨みつらみは別として)批判めいた言説は一切出てきません。「東京裁判」も東条を悪役としては描いていません。むしろ、「天皇免責問題」における東条の「貢献」は知っておく必要があります。こういう風に考えてくると、東条がステレオタイプの悪役として出てきた途端、その作品は失敗作であることが予想されるし、これまで、この予想が外れたことはありません。(例えば、「日本のいちばん長い日・原田版」のことを言っている)

(書いている本人は、思いっきり、情緒的・感傷的になっているのに)情緒的・感傷的にならないように書く。言うは易し、行うは難し、ですが、見習いたいものです。(20180809)

公理系ミステリーについて

ミステリー好きとしては、思い切り理論的にミステリーを語りたいのだが、そのようなことは既にされていて、自分の浅はかさを思い知った。(例えば、飯城勇三『本格ミステリ戯作三昧』。これは素晴らしいです。)でも、少ししてみよう。

自分で勝手に「公理系ミステリー」と呼んでいる一群の小説がある。「公理」というのは、疑ってはいけない約束事のこと、公理は、どんなに不自然に見えても疑ってはいけない。「公理系ミステリー」と僕が呼んでいるのは、突飛な状況を設定して、そこでのルールに従った推理を展開する小説群である。結構数多く存在する。多分、一番有名なのは、山口雅也氏の『生ける屍の死』でしょう。ここでは、死んでも生き返るという特殊状況を考えて、このルールの下で犯人捜しを行う。『生ける』は、ミステリー好きは必ず絶賛しなければならない本とされているのだけれど(映画における『2001年宇宙の旅』のようなもの)、あまり好きではない僕にとっては少々厄介な存在だ。だって、論文を読んでいるみたいなんだもん。(なお、最近、あるところで紹介されていた同氏の『奇偶』を読んだのだが、これは凄い。これまでに読んだ全ミステリーの中で、上位十指に入る可能性がある。きちんと数えていないので、検証は要るが。)

パズラーの極北である公理系ミステリーの最大の問題点は、話(ストーリー)そのものがそれほど面白くない、という所にある。ということで、敬遠していたのだが、その考えを完全に改めざるを得ない2つの小説を最近読んだ。

その1。今村昌弘『屍人荘の殺人』。昨年度の各種ミステリー・ランキングで軒並み一位を獲得。ゾンビ設定（これ自体は目新しくはない）で、理論（？）もストーリーも文句なしに面白い。

その2。アイザック・アシモフ『鋼鉄都市』。ミステリー好きを自認していながら、今頃読んでいる。かたじけない。ロボットと人間が共存する未来が舞台。アシモフの「ロボット三原則」というのがあって、これが全然面白くなく、何を今更言っているのだ、と長い間不満に思っていたのだけれど、これが完全な認識不足であった。「三原則」は、おそらく、この小説を書くためだけにアシモフが考えたのだと思う。純粋な演繹法で、この3つの「公理」から犯人が分かってしまうのだ。これはかなり凄い。（もちろん、話それ自体も非常に面白い。）

すべてのミステリーが暗黙の裡に仮定しているのは、地の文（「誰々は…」と3人称で書かれている文章。いわゆる「神の視点」）は真実を語っていて、疑ってはいけない、ということ。「地の文」は公理なのである。一人称で書かれた文章（「私は…」）は、ミステリー好きはむしろ疑ってかかる。（もちろん、クリスティーの有名な小説以降の話である。）

地の文の語り手（作者、小説家）は嘘をつかないという約束事（ルール）が無いと、演繹を行うための「よすが（縁）」が全く無くなってしまい、そもそもミステリー小説として成立しない。「信頼できない語り手」を認めるかどうか、ミステリーと他の小説分野を分ける決め手となると考えるがどうか？これを勝手に「デマーケーション・プロブレム」と呼んでいるのだが、そんなに奇抜な考え方ではないので、既に検討（？）されているかもしれない。冒頭で書いたように、最近のミステリー研究は侮れません。（20180922）

以下、脈絡関係なし。

好きな言葉：血税、いけしゃあしゃあ、合流、けんか腰、レッツゲッツァヘララヒー（Let's get the hell out of here.）

大嫌いな言葉：清濁併せのむ、「過去問に似ていない」、「尾崎さんは、研究はまあまあだけど」